



庭代の庚申塚

伊勢別街道は京都方面からの参宮客が多く往来していたことが知られており、芸濃地域にはその伊勢別街道の宿場の一つである楠原宿があります。「庭代の庚申塚」は東海道関宿から伊勢別街道沿いに南下した楠原宿の手前に位置します。建てられた年代などの詳しいことは分かっていませんが、明治12(1879)年に作成された神社等の明細を記した台帳である「社寺明細帳」には位置や大きさなどが記載されています。

庚申塚の「庚申」とは干支の「庚申(かのえさる)」のことです。干支と聞くと十二支を思い浮かべる人も多いかも知れませんが、本来は十干と十二支を組み合わせたものをいい、60通りの組み合わせを年や日、時間に当てはめて暦などに使用していました。

中国の道教の影響を受けた庚申信仰と呼ばれるものがあり、60日に一度この「庚申(かのえさる)」の日が巡って来る晩に眠ると体内にいる「三尸虫」が天に昇り、その人の悪業を天帝に告げ、宿主の寿命を縮ませるという言い伝えが

あります。そこで、人々は徹夜で般若心経を唱えるなどして三尸虫が体から抜け出さないようにしたとされています。

この庚申信仰は平安時代にはすでに貴族の間で信仰され、最盛期は元禄・享保年間(1688年～1736年)頃だったとされています。

全国各地の庚申を祭る碑には、三尸虫を抑える神として青面金剛石像しょうめんこんごうが建てられることが多く、この庚申塚にも三面六臂忿怒形の青面金剛石像さんめんろくひふんぬが瓦葺きの小さなお堂の中に祭られています。市内では他にも庚申塚が複数確認されていることから、当時、庚申信仰が広く信じられていたことがうかがえます。

また、この塚には楠原の浄蓮寺の僧が開眼供養をした馬頭観音像や、地藏菩薩などのさまざまな石造物が見られます。

晩秋の一日に伊勢別街道を歩き、庭代の庚申塚を訪れてみてはいかがでしょうか。



青面金剛石像



庚申塚にあるお堂



おわび 広報津10月16日号17ページに掲載の「歴史散歩194 国登録有形文化財妙華寺本堂」に誤りがありました。1行目「久居元町」は正しくは「久居二ノ町」です。おわびして訂正します。